

ナイチンゲール思想とアントロポゾフィー看護 —その類似点を中心として—

藤井智恵美¹⁾・瀧口文子²⁾

Nightingale's thought and Anthroposophic Nursing

Chiemi FUJII, Fumiko TAKIGUCHI

抄録

アントロポゾフィー看護という言葉は多くの医療者にとってまだ耳新しい。アントロポゾフィー看護は、アントロポゾフィー医学の考え方を基盤とした看護である。アントロポゾフィー医学は、20世紀初めルドルフ・シュタイナー博士によって始められたアントロポゾフィー（人智学）という人間観・世界観を基盤として、イタ・ヴェーグマン医師の協力の下に創始された医療体系である。その医学を基盤とした看護がアントロポゾフィー看護である。日本ではシュタイナーというと教育法で知られている。

今回は、ナイチンゲールの思想を元にアントロポゾフィーの看護の方向性を紹介することを試み、アントロポゾフィー看護を体系づけていく第一歩となれど考える。

Abstract

The term, Anthroposophic Nursing, is does not known generally to medical workers. Anthroposophic medicine was based on Anthroposophy, which was started in the 1920s by Dr. Rudolf Steiner. Anthroposophic medicine is one of the medical systems, and it was begun under Dr. Ita Wegman's cooperation. Anthroposophic Nursing is based on the Anthroposophic medicine. In Japan it is known as Steiner's education method.

In this paper, we try to introduce the direction of Anthroposophic Nursing, which is based on Nightingale's thought. We hope that it will be the first step toward formulate a system of Anthroposophic Nursing.

Key word : アントロポゾフィー医学 (Anthroposophic Medicine), アントロポゾフィー看護 (Anthroposophic Nursing), ナイチンゲール ((Florence) Nightingale), シュタイナー ((Rudolf) Steiner)

¹⁾ 共立女子短期大学

²⁾ 株式会社アクトグループ

はじめに

アントロポゾフィー看護と言う言葉は多くの医療者にとってまだ耳新しい。アントロポゾフィー看護は、アントロポゾフィー医学の考え方を基盤とした看護である。では、アントロポゾフィー医学とは何か。

アントロポゾフィー医学は、20世紀初めドルフ・シュタイナー博士によって始められたアントロポゾフィー（人智学）という人間観・世界観を基盤として、イタ・ヴェーグマン医師の協力の下に創始された医療体系である。シュタイナーは人間を一つの統合された全体性としてとらえ、人間は肉体だけでなく、生命力、感受性、精神など目に見えない部分があり、目に見えない部分と身体とは互いに影響を与えあい、切り離さないものととらえる。また、人間の自然治癒力を高め、健康と病気への認識を深め、現代医学と対立せず、自然科学的な医学よりさらに幅広い医療を展開しようとするものである。その医学を基盤とした看護がアントロポゾフィー看護である。

シュタイナーというと日本では現在もっとも知られているのは、「シュタイナー教育」といわれる教育法である。シュタイナーの人間観、世界観で有志の方々がその教育を始めたシュタイナー学校が、無認可から、学校法人として認められるようになってからまだそれほど年月はたっていない。シュタイナーの世界観は教育の分野だけでなく、医学・薬学・看護・農業・経済など幅広い分野にわたっている。

アントロポゾフィー看護に目を向けると、日本で初めてアントロポゾフィー看護を紹介しているのは、「シュタイナーに看護を学ぶ」と題する本の著書の大住裕子氏である。紹介されてから20年近くの年月を経て、徐々に日本でアントロポゾフィー看護を学ぼうと、注目をしている看護職は増えつつあると考える。しかし、シュタイナーの人間観、世界観は奥が深く、まだまだその入り口に立つところである。が、人間

は身体だけでなく精神、魂を含めた存在としてとらえ、看護の対象となるのは、その人間で対象に向かえることは有意義であり、その一面だけでも現在の看護の方法に応用しようと試みれば有効であると考ええる。

特に、看護の原点といわれているナイチンゲールの思想に通じること、重なることが多くあるとも考えるのは、アントロポゾフィー看護に触れた看護職に多く共通している感想である。そこで今回は、ナイチンゲールの思想を元にアントロポゾフィーの看護の方向性を紹介することを試み、アントロポゾフィー看護を体系づけていく第一歩となれどと考える。

1. 看護の本質的な問いについて、 「健康・病気・看護とは何か」

ナイチンゲールは〈看護婦の訓練と病人の看護〉において健康・病気・看護・訓練について述べている。

「看護とは、健康を回復し、または保持し、病気や傷を予防し、またはそれを癒そうとする自然の働きに対して、できる限り、〔それを受け入れる〕条件の満たされた最良の状態に私たち人間をおくことである¹⁾。」「健康とは、単に元気であることだけでなく、自分が使うべくもっているどの力をも充分に使う状態である。病気や疾病とは、健康を阻害してきたいろいろな条件からくる結果や影響をとり除こうとする自然の〔働きの〕過程である。癒そうとしているのは自然であり、私たちは自然の働きを助けなければならないのである。自然は病気というあらわれによって癒そうと試みているが、それが成功するか否かは、部分的には、いやおそらく全面的に、どうしても看護のいかににかかってこざるをえない。したがって、看護とは、患者が生きるよう援助することであり、《訓練》とは、患者が生きるように援助することを看護婦に教えることにほかならない。看護はひとつの芸術であり、それは実際的かつ科学的な、系統だった訓練を必要とする芸術である¹⁾。」

アントロポゾフィー医学・看護でも類似のことがいわれている。アントロポゾフィーの世界観を提唱したルドルフ・シュタイナーは医師ではないので、資格のある医師達の協力の基にアントロポゾフィー医療の発展に努めた。彼は「アントロポゾフィー医学は、今までの積み重ねてきた医学にとって代わるのではなく、むしろそれを拡大すべきものだ」と主張した。そのために、アントロポゾフィー医師・看護師は全員まず最初に通常の医学、看護の資格を取得し、そのうえで人間の健康と病気についての精神科学の観点から学ぶ必要がある。それによって、アントロポゾフィー医師・看護師の仕事の領域は通常の医療の枠を超えて広がっていく。

アントロポゾフィー医学の主目的は、患者の自然治癒力を助長することで、通常の医学的知識と経験をしっかり踏まえたものであり、通常の医学に取って代わる代替療法ではない。代替医療の中には、自然科学の研究より起源の古い精神的理念を有するものもあり、通常の医学に欠けているものを求めて代替医療に向かうとすれば、これまでの自然科学の成果を無視して、時計の針を逆戻りさせるようなものとなる。必要なのは過去に還ることではなく、これまで積み重ねてきた医療の領域を広げて、人間の精神的側面と物質的側面の両方に配慮することだ。その違いは、アントロポゾフィー医学が患者の身体的要素だけでなく非身体的（精神的）要素も対象とするところにある。

したがって、アントロポゾフィー医学は、単に病気の症状を抑えるのではなく、その根本原因を治療することを目指している。総合的な人間像にしたがって、通常の方法に一連の新たな薬剤や治療法を付け加え、治療の可能性を広げる。アントロポゾフィーという名称はギリシャ語のアントロポス〈人間〉とソフィア〈智恵〉に由来するもので、人間の自己認識を通じて精神的叡智に至る道を示唆している。

アントロポゾフィー看護師の仕事の定義は、

患者に十分な強さや意思あるいは知識があれば自力で行うと思われる、健康の回復、あるいは安らかな死に役立つ活動を援助することである。また、看護とは、患者が指示された通りに治療を行い、できるだけ早く援助が不要になるよう手助けしてやることでもある。病変を治したり、症状をなくすことだけを看護の目的にするのではなく、自分と向き合い、自分の意識をより高めていくことも大きな目的の一つとしていく。病気を「自然の秩序が乱された状態」と見るだけではなく、「成長や発達のお機」としてもとらえるので、看護は「それぞれが自分自身に向かい合うことができるような状況を整えること」であるともいえる。

そのために、患者の物質的環境に気を配ることも一般的な看護の仕事である。ベッドに必要なものが十分整っていて、周囲は清潔で暖かく、新鮮な空気が十分入るようにすることなどだ。アントロポゾフィー看護師は、その他に、患者の心魂的環境とでもいうべきものにも気を配る。これには、部屋の光の質、色、音、匂い、さらには周囲の芸術的要素など患者が感受するものすべてが入る^{2,3)}。ナイチンゲールもケアに必要な具体的なものとして、新鮮な空気・日光、暖かさ、静かさ、清潔さ、食事を適切に選択して与えることなど⁴⁾をあげている。

ナイチンゲールの「看護婦の訓練と病人の看護」の「回復を促すための手だて」の中には〈からだや手足を適切な方法で摩擦すること。湿布薬を創り湿布をすること⁵⁾〉も載っている。アントロポゾフィー看護では自然治癒力を強めるため、からだや手足を適切な方法で摩擦する独自の方法であるアインライビングや、その人にあった湿布薬を用いた湿布も看護技術の大事な位置を示す^{2,3,6,7)}。

ナイチンゲールは「看護はひとつの芸術である¹⁾」と述べているが、アントロポゾフィー医学・看護でも芸術療法を含め芸術的なものを重視している。

2. 看護における観察について

ナイチンゲールは看護における観察について著書に何度も述べている。「最も重要でまた実際の役に立つものは、観察とは何か、どのように観察するか、どのような症状が病状の改善を示し、どのような症状が悪化を示すか、どれが重要でどれが重要でないのか⁸⁾。」「誰でも、その意志さえもてば『すべて真実を、そして真実のみ』を述べることができると考えられているようである。しかし、『すべて真実を』述べ『真実のみ』を述べるには、観察力と記憶力とが結びついた、多くの能力が必要とされる⁹⁾」「よい看護というものは、あらゆる病気に共通するこまごましたこと、およびひとりひとりの病人に固有のこまごましたことを観察すること、ただこの2つだけで成り立っているのである¹⁰⁾。」「ある看護師の『特殊な能力』や、別の看護師の患者に対する能力不足も、前者には患者を動かしているものについての綿密な観察があり、後者には観察が欠如していた、ということにはほかならない¹¹⁾。』

つまり、「面密な観察」をしようと努力すれば、誰でも「ある看護師の『特殊な能力』」が得られ、よく観察することによってその本質が見えてくる、とナイチンゲールは述べている。

アントロポゾフィー看護でも「観察」は重要視されている。アントロポゾフィー看護における「観察」は「現象学的観方」という方法である。「現象学」というとフッサールに始まる「現象学」を想起する人が多いが、それとは異なる、「ゲーテ＝シュタイナー的観察術」とも称する観察法である。

フッサールとシュタイナーは同時代の人で、二人ともブレンターノ¹²⁾という師から学び、影響を強く受けている。「現象学」という言葉はそれ以前からヘーゲルなど他の人も使っており、両者の同じ師であるブレンターノを通して、共通する部分もあるが、二人が本質的に意図した

内容についてはかなり異なっている¹³⁾。

アントロポゾフィーでの「現象学的観方」は、シュタイナーとその100年程前に生きたゲーテの観察術に多くを学んでいる。シュタイナーからみたゲーテの対象的思考方法の本質は、「考えるように観る、そして、観るように考える」ことにある。傍観者のみにみるのではなく、注意深く、「共感的」にみる。日本人は「共感的」というと「同情的」と混同しやすいが、両者は明確に区別しなくてはならない。早急な判断を控え、映像的に物事をとらえることを重視する。客観的な科学的思考と、共感的感情が重要な役割を果たす芸術的行為を統合したものだともいえる。植物の内側から成長するエネルギーを、細かく分析するのではなく、芸術的に全体的に感じとるのである。そして訓練を通して、「新しいまなざし」がはぐくまれ、そのまなざしが世界への共感を広げ、同時に私たちの内面、内なる自然を豊かなものにしてくれる。内なる自然には植物的なものや動物的なものがある。人間には植物と共通する生命形成力があり、それに意識・注意を向け、気づいていくことによって人間の中の植物的なものを活性化させていく。耕し、活性化させることを通して、外なる自然を真に知ることができるようになる¹⁴⁾。その「自然」の中に「人間」も含まれている。それは行おうという意思があり、訓練を重ねていけば、誰にでもできるようになるといわれている。この観察方法は、看護に限らず、アントロポゾフィーの世界観による医学や教育等あらゆる分野で重要視されており、そのための「訓練」「教育」も重要な位置を占めている。

フッサールから始まったといわれる現象学は、ハイデッガーを経て実存主義哲学となり、ジーン・ワトソン¹⁵⁾やバトリシア・ベナー¹⁶⁾の看護理論に影響を与えている。メルロ＝ポンティは身体の現象学の考察を行い、実存主義的現象学となり、ローズマリー・パースィの看護理論¹⁷⁾に影響を与えた。フロイトの精神分析の流れも受け L. ビンスワンガーはハイデッガー

ーやフッサールの影響のもとに「現存在分析」を創始し、M. ボスはさらに独自の「現存在分析」を展開した。ロロ・メイは実存心理学という形で受け継ぎ、ヴィクトール E. フランクルは実存分析からロゴセラピーとして、生きることの意味と価値が人々にとっていかに重要であるかを述べた。そしてそれは、トラベルビーの看護理論に影響を与えている¹⁸⁾。

アントロポゾフィー看護でも「生きることの意味」を大切にしている。

〈フッサールから始まったとされている現象学〉の〈ナイチンゲールから始まった看護理論〉への影響^{18, 19, 20, 21)}を、〈シュタイナーから始まった現象学的観方、アントロポゾフィー看護理論〉と比較していくことは、今後の看護における観察方法および看護理論へ寄与していく可能性を与えてくれる。

3. 看護師の教育・訓練について

ナイチンゲールは看護師の教育・訓練についても詳細に述べている。まず、訓練の前に大切なこととしては、「感じとること」、「自分でものを考えること²²⁾」をあげている。その訓練の内容について「他人を統率するには、まず自分自身を統率すること、これが第一の条件であることはいくまでもありません²³⁾。」と述べ、看護師自身の自己教育を第一と考えている。「自分の面倒もみきれないで、他人の世話のできるはずがありません²³⁾。」と大変厳しい言葉もある。さらに「第二の条件は、自分を何かに『見せかけよう』とあがいたりはいしないで、『ありたい姿』に『ある』ように努めること²³⁾。」「責任ある立場の人は、正しくかつ公平であるべきで、ものの両面をよく見きわめたいうで、また情にほだされたり好き嫌いの感情で動かされたりすることなく、公正な判断のみにもとづいて行動しなければならない。そしてまた、常に中庸を保ち、自分の監督下にある人々が何を求めているかを忘れないでいることが大切である²⁴⁾。」と述べている。

アントロポゾフィー看護の学習の中には「看護者自身の発展」という項目があり、自己教育について詳しく学ぶ機会を設けている。

アントロポゾフィー看護師は、個々の治療が相互の意思疎通が悪いために足を引っ張り合うことになるのではなく、全体の調和がとれるようにそれらをまとめるうえで中心的な役割を果たす。アントロポゾフィー看護では、通常の看護にみられるような技術的な専門化の中で失われてしまった患者との接触を取り戻し、看護師の任務のあらゆる側面を調和させることを目指す。看護師の活動には常に必ず、ベッドに横たわる単なる一つの身体としてではなく、心魂と精神を有する人として患者の世話をする任務を負っているという意識とその任務に対する畏敬の念がともなっている²⁵⁾。

シュタイナーは人々の自己教育・訓練について著書「いかにして高次の世界を認識するか」にも詳しく書いている。「まず新鮮な気持ちを抱いて、健全な感覚と鋭い観察の才能を働かせながら感覚的な世界を観察し、そのあとでみずからの感情に身をゆだねる。私たちは、個々の事象が何を意味しているのか、ということ、悟性的な思考をとおして理解するのではなく、事物そのものに語らせるのです²⁶⁾。」「人の話を聞く時に、自己の内面を完全に沈黙させる習慣を身につけなくてはなりません。すぐに湧き起ってくる不快感や、拒絶したいという気持ちや、さらには同意したいという気持ちまでも、すべて沈黙させることが大切です。『これらの感情は、魂の表面的な部分には存在していないとしても、私の魂のもっとも奥深い部分に潜んでいるのではないだろうか』とたえず注意深く、自分自身を観察しなくてはなりません。」「この訓練を続けるうちに、私たちは、自分自身の意見や感情をすべて排除して、完全に無私の態度で相手の言葉に耳を傾けることができるようになります²⁷⁾。」

このことは、ナイチンゲールのいう「訓練」

の一つ「公正を保つ」「中庸を保つ」こととも共通していると思われる。

この他、アントロポゾフィー看護での教育・訓練の具体的な方法はいくつもあるが、ここではナイチンゲールと共通した基本的な方法・目的を述べておくにとどめる。

4. ナイチンゲールのバイオグラフィー

看護の基礎項目にマズローの法則（エイブラハム・マズロー）²⁸⁾ というものがある（図1）。欲求の5段階説ともいう。

人間には、生活の場を問わず、すべての人に共通する基本的ニーズをもっている。最も基本的な欲求から高位の欲求までが五つの階層になっており、土台の上に家が建つように、欲求も下位の層が満たされれば上位の層に移っていくという説だ。

- ① 生理的欲求（人間の生命維持に必要な行動への力であり、食欲・睡眠・性欲などのニーズが満たされないと、その命の存続は危うくなる。）
- ② 安全性欲求（死、傷害、痛み等の危険から解放させる物理的な安全や保護で住居・衣服・貯金などを示している）
- ③ 所属と愛の欲求（協同・人間関係から愛されている、所属していると感じることができ、

孤独感から逃れることができる）

- ④ 自我の欲求（承認の欲求であり、自己価値を高め、それを維持することを必要とする。他者からの尊重と自己尊重がある。）
- ⑤ 自己実現欲求（自己の能力や資質を十分に活かそうとする内面の欲求である。人は自己の可能性を最大限に発揮しようとする）

看護の基礎講座でも取り上げられている発達心理の中にはエリクソンの「人間の発達漸成論」というものもある。エリクソンは、人間の成長を8段階に分けて考えた²⁹⁾（表1）。

そして、それぞれの時期に発達課題があり、人間は順次これらの発達課題を克服し、自己成長していくとされている。それらを順調にクリアすることが、健康であり、上手くいかなくなった時に病気等の不調があらわれると述べている。

アントロポゾフィーの人間観に根ざす医療や教育は、人の健全な成長と発達のアーキタイプに基いて、体系化されている。特に、バイオグラフィー³⁰⁾における成長のリズムや課題を、7年ごとの周期で見ている（表2）。

0歳から63歳までの基本的な分け方と、課題、基本徳目、リズムは（表2）のようである。た

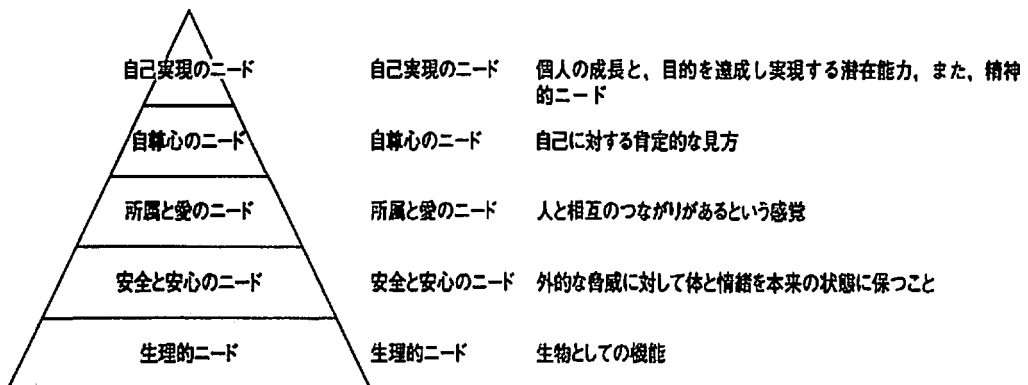


図1. マズローの人間のニーズの階層理論（出典 ナーシング・グラフィカル看護学概論、メディア出版）

だし、これはあくまでもアーキタイプであり、人によっては、8年周期となったりと、個々人の独自性も認識されている。

ナイチンゲールの生涯³¹⁾をこのバイオグラ

フィーのそれぞれの時期に分けて考察していくと以下ようになる。

第1〈七年期〉0-7歳：かずかずの善政を施す父から「善」を学び、また父母や親族の愛

表1. エリクソンの人間発達 漸成論における作業仮説表(出典 系統看護学講座 母性看護学〔1〕 医学書院)

発達段階	心理-社会的課題と危機	基本的徳目(活力)	重要関係の範囲
I	基本的信頼感と不信感	希望	母性
II	自律感と恥、疑惑	意思	親
III	主導感と罪悪感	目的	基本家族(親・同胞との関係)
IV	勤勉感と劣等感	コンピテンス	「近隣」・学校
V	アイデンティティとその拡散	忠誠	仲間集団・外集団、リーダーシップのモデル
VI	親密感と孤独感	愛	友情、性愛、競争、協力の関係におけるパートナー
VII	生殖感と沈滞感	世話	分業と家事の共有
VIII	統合感と落胆	英知	「全人類」、 「わが一族」

(エヴァンズ, R.I. 著, 岡堂哲雄・中園正身訳: エリクソンは語る——アイデンティティの心理学, p.160, 新曜社, 1981 による, 一部改変)

表2. アントロポゾフィーの人間観におけるバイオグラフィの発達段階 [近見・瀧口編]

発達段階	年齢	心理—社会的課題	基本的徳目	人生全体のリズム
第1〈七年期〉	0-7 歳	意志が育つ	善	もらうこと、受け取ること。 「人間になりゆく」時期、準備期間
第2〈七年期〉	7-14 歳	感情が育つ	美	
第3〈七年期〉	14-21 歳	思考が育つ	真実	
第4〈七年期〉	21-28 歳	経験をつむ	関係性	もらうことと与えることの交互作用が強く刻印づけられる。「人間である」時期、生活と闘争の期間
第5〈七年期〉	28-35 歳	組織に生きる	構築力	
第6〈七年期〉	35-42 歳	問いをもつ	意識	
第7〈七年期〉	42-49 歳	葛藤する	判断力	与えることが全面にでる。 「人間として成熟する」時期
第8〈七年期〉	49-56 歳	新たな地平を得る	創造性	
第9〈七年期〉	56-63 歳	本質に向かう	受容	

情の中で意志が育っていった。

第2〈七年期〉7-14歳：父の教育方針や上流社会の「美」の中で、感情豊かに育った。

第3〈七年期〉14-21歳：16歳の時はじめて「神のお召」の声を聞き「真実」を知った。また、旅行や社交界でいろいろな人と交流し思考が育った。

第4〈七年期〉21-28歳：「天命の方向」を悟り、その方向へ進むためにいろいろな経験を積み、家族を始め人々や物事との「関係性」を模索していた。

第5〈七年期〉28-35歳：看護についての学びと関係者との信頼関係を「構築」し、クルミア戦争で看護団という組織を引率する使命を受け、実行した。

第6〈七年期〉35-42歳：社会問題・人間についての「問い」が多く発生し、過労で倒れながらも、強い問題意識・目的意識をもち続け、看護発展のために統計学を駆使したり〈病院覚え書〉などを執筆することによって社会的に認められるようになり、ナイチンゲール助産師訓練学校も開校した。

第7〈七年期〉42-49歳：ナイチンゲール助産師訓練学校閉鎖や、勢力争いで悪戦苦闘する「葛藤」の時期を経験し、その中で判断力を養い人間として成熟していった。

第8〈七年期〉49-56歳：ナイチンゲール看護師訓練学校の再建を果たし、いろいろな衛生問題についての助言や著作で、新たな地平にたった「創造的」な活動を行った。

第9〈七年期〉56-63歳：母との確執も受容という肯定的な受け止め方ができるようになり、「貧しい病人のための看護」の寄稿や、地域看護運動に乗り出し、いろいろな形で看護体制を整え、本質的な仕事をした時期といえる。

以上のように、ナイチンゲールの生涯をみていくとアントロポゾフィー看護で重要な「バイオグラフィー的課題・基本的徳目・人生全体のリズム」を適切に乗り越えてきたことがわかる。

そのことが健全なナイチンゲール思想につながった、ともいえるだろう。

アントロポゾフィー看護からのバイオグラフィーの見方には、こういった見方以外にも種々な見方があるが、それらについての詳細は別の機会に述べていくこととする。

おわりに

アントロポゾフィー看護がいかにナイチンゲール思想に近いものであるかを明らかにすることが、今回の論文の第一のテーマであった。人が病気になることの意味や、病気の症状に向かいあうことだけが看護することではなく、その対象の固有の人としての全体を知ろうとすること、それにつながる観察することの意味、意義について対象に目を向ける看護の原点に通じるところである。

それぞれの詳細については、各々が大きく深いテーマであり、今後はそれらの一つ一つを掘り下げてゆきたい。そこには看護はあくまでも実践の科学であり、机上の内容にとどめることなく私たち自身が対象と向き合い実践を重ね、自分を広げて学び取る力を養い、さらに深めていくことにより、現在の看護をより発展させていくことにつながっていくと考える。

ナイチンゲールの研究者からは多くの意見があると考えるが、多方面からのご意見をいただける機会として、これから日本におけるアントロポゾフィー看護が体系づけられ、その方向性を見いだしていくための出発点としたい。あたかもやっと目の前に現れた種が、多くの水や光や風を受けてその植物が成長するように、対象となる人々の人間としての存在を尊重し、自然治癒力を高め、真の健康を作り出していけるような看護の存在を構築するために自己研鑽を重ねてゆきたい。

引用・参考文献

- 1) フロレンス・ナイチンゲール「ナイチンゲール著作集 第二巻」現代社、2006、P97

- 2) マイケル・エバンズ他「シュタイナー医学入門」群青社, 2005
- 3) 大住祐子「シュタイナーに〈看護〉を学ぶ」春秋社, 2000
- 4) 前掲書 1), P132
- 5) 前掲書 1), P116
- 6) 伊藤良子「シュタイナーの人間観に基づいた湿布療法の基礎的知識とその一例としての足浴療法の紹介」京都市立看護短期大学紀要第28号, 2003
- 7) ミヒャエル・グレックラー他「小児科診療室 シュタイナー教育・医学からの子育て読本」水声社, 2006
- 8) フロレンス・ナイチンゲール「ナイチンゲール著作集 第一巻」現代社, 2007, P.317
- 9) 前掲書 8), P.320
- 10) 前掲書 8), P.335
- 11) 前掲書 8), P.336
- 12) ブレンターノ、フッサール「世界の名著51 ブレンターノ、フッサール」中央公論社, 1970
- 13) ルドルフ・シュタイナー「哲学の謎」水声社, 2004
- 14) マーガレット・コフーン「植物への新しいまなざし ゲーテ＝シュタイナー的植物観察術」涼風書林, 2007
- 15) ジーン・ワトソン「ワトソン看護論 人間科学とヒューマンケア」医学書院, 2009
- 16) パトリシア・ベナー編「ベナー 解釈的現象学 健康と病気における身体性・ケアリング・倫理」医歯薬出版株式会社, 2006
- 17) ローズマリー・リゾ・パースィ「パースィ看護理論 人間生成の現象学的探求」医学書院, 2004
- 18) 勝又正直「はじめての看護理論」医学書院, 2005
- 19) アン・マリナー・トメイ他「看護理論家とその業績」医学書院, 2004
- 20) サンドラ・P・トーマス他「看護学名著シリーズ 患者の声を聞く 現象学的アプローチによる看護の研究と実践」エルゼビア・ジャパン, 2006
- 21) Marlene Zichi Cohen 他「看護における質的研究 2 解釈的現象学による看護研究」日本看護協会出版会, 2007
- 22) フロレンス・ナイチンゲール「ナイチンゲール著作集 第三巻」現代社, 2006, P285
- 23) 前掲書 22), P273
- 24) 前掲書 22), P274
- 25) 前掲書 2), P134
- 26) ルドルフ・シュタイナー「いかにして高次の世界を認識するか」柏書房, 2003, P42
- 27) 前掲書 26), P46
- 28) 「ナースィング・グラフィカ〈16〉 基礎看護学 看護学概論」メディカ出版, 2009, P163, 190, 229
- 29) 「系統看護学講座 母性看護学[1]」医学書院, 2009, P3
- 30) グードルン・ブルクハルト「バイオグラフィ・ワーク入門」水声社, 2006
- 31) セシル・ウーダム・スミス「フロレンス・ナイチンゲールの生涯 上・下巻」現代社, 1999